3・4 歳齢保育園児の社会的能力と仲間入り行動

若松　真菜

【背景・目的】子どもは遊びを通して社会的能力を発達させていく。遊びに参加するための仲間入り行動は幼児の社会性を高めるために必要な行動である。社会的能力と仲間入り行動は密接に結びついていると思われるが、ほとんどの研究は年中児（4・5 歳齢児）、年長児（5・6 歳齢児）を対象としたものであり、年少児（3・4 歳齢児）を対象としているものはほとんどない。しかし、社会的能力は 3 歳から発達することが指摘されており、対象者の年齢をさらに広めて検討を行うことが重要であろうと思われる。また、幼児の仲間関係についてインタビュー形式を用いている先行研究が多く、自然遊び場面で仲間関係をとらえているものは少ない。それゆえに、行動観察を通して子供たちの自然なやり取りから仲間関係の指標を算出することは生態学的妥当性を高めると考えられる。そこで本研究では、1. 集団保育場面において、仲間入り行動が生起してから成立、または不成立に至る過程を詳細に明らかにすること、2. 集団保育場面において、仲間入りと仲間関係についての関連を明らかにすること、3. 社会的能力である言語能力、心の理論、共感性の発達と仲間入り行動が、どのような関係にあるのかを明らかにすること、の 3 つを目的とした。

【方法】大阪府内の保育園の 3・4 歳齢児クラスのうちの 1 クラスを対象として行った。協力児は 39 名（男児 18 名、女児 21 名）であり、平均月齢は 49.19 ヵ月（±3.95 ヵ月）であった。保育園での自由遊び場面において、個体追跡サンプリングによって協力児 1 人につき 10 分間観察し、10 分間内で行われた仲間入り行動を記録した。スキャンサンプリングによる児の近接の関係性のデータから、児の親密度と中心性の指標を算出した。また児の社会的能力を測定するため、語い検査、共感性課題、誤信念課題を行った。

【結果・考察】(仲間入り方略）ごっこ遊びなどで、役になりきって自然な仲間入りを試みたりするという方略が一番多く用いられていた。年少児では「いれて」という慣例的な明示的方略が定着しておらず、暗黙的な方略が仲間入りのルールとなっていることが考えられる。また開始児の共感性能力が高い場合、暗黙的方略を用いることが多く、模倣・ついていく方略を用いることが少なかった。（仲間入り行動に対する相手児の反応）呼びかけ・挨拶・質問方略を用いた場合、相手児からの承認や拒否といった反応が少なく、見るだけになることが多かった。相手児から仲間入りへの承認を得るためには、自分の「仲間に入りたい」という明確な意思を伝えることが重要であると思われる。性別でも違いがみられた。躍動遊び場面では、相手児から拒否されることが多かった。躍動遊び場面は男児同士で遊んでいる場合が多くみられた。男児は攻撃性が高いと言われており、男児同士の躍動遊び場面では、拒否という攻撃的な反応が多くなったのかもしれない。（仲間入り行動の成否）親密性に関しては、開始児と相手児の親密度が高いほど仲間入り行動が成功することが多いという結果になった。年少児では、まだクラスの中心的な人気児というものがはっきりしておらず、開始児と相手児同士が仲が良いかどうかが仲間入り行動の成否に大きく関わっているのではないかと思われる。

これまであまり検討されてこなかった社会的能力が発達し始める年少児の仲間入り行動について詳細に検討したこと、そして従来のインタビュー形式ではなく自由観察場面から仲間関係の指標を算出し、このような結果を得られたことが、本研究の大きな意義だといえる。(比較発達心理学)